

Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags による *Bodhipathapradīpa* の注釈書について

望 月 海 慧

はじめに

ヘルムート・アイマーは、その著書『菩提道灯論 チベットに伝承したアティシャの教訓詩 (*Bodhipathapradīpa: Ein Lehrgedicht des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna) in der tibetischen Überlieferung*)』の中の「*Bodhipathapradīpa* からの引用をともなう著書（二次的なテキスト証拠）」という章において、次の五つのテキストをあげている⁽¹⁾：

1. *Bodhimārgadīpapañjikā* (*Byang chub lam gyi sgron ma'i bka' 'grel*) by Dīpaṃkaraśrājñāna.
2. *Dam chos yid bzhin gyi nor bu thar pa rin po che'i rgyan zhes bya ba theg pa chen po'i lam rim gyi bshad pa* by sGam po pa Dvags po lha rje (1079-1153).
3. *Byang chub lam gyi sgron ma'i rnam bshad phul byung bzhad pa'i dga' ston*⁽²⁾ by Blo bzang chos kyi rgyal mtshan (1567-1662).
4. *Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa phul byung dges pa'i mchod sprin* by dBal mang dKon mchog rgyal mtshan (1764-1853).
5. *Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa gzhung don gsal ba'i nyi ma* by Brag dkar sprul sku Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags.

このうち、タイトルからみても解るように、二番目のテキスト⁽³⁾は『菩提道灯論』に対する注釈書ではないが、その引用の多さからここに並記されている。これを除くと、『菩提道灯論』に対する注釈書として、四つのテキストが伝承されていたことがわかる⁽⁴⁾。本稿では、このうち最も新しい注釈書である Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags による注釈書の和訳を提示するものである⁽⁵⁾。

彼に関するデータについては、詳しい情報は得られていない。アイマーによると、彼の生存年代も注釈書の著述年代も明らかではないが、1878年に著された Mi pham rnam rgyal による『入菩提行論』の第9章に対する注釈書 *Nor bu ke ta ka* に対する返答を1889年に著している⁽⁶⁾、19世紀末に生存していた者となる⁽⁷⁾。

本注釈書の注釈方法としては、全体を科門に分けて構成するチベットの注釈書に見られるオーソドックスなスタイルが採られている。根本偈の語句を一語ずつ解説するだけで、そこからさまざまな思想的なトピックスを詳論することはない。また経証として、その他の経典や論書を引用することもなく、コンパクトな注釈書である。従って、注釈者独自の思想的立場や主張を抽出することはできず、あくまでも偈頌で書かれているために語が不足している根本偈をどのように読むかという解釈が述べられているだけのテキストである。

次に、著者が根本偈の全体の内容をどのように理解していたのかについて、その注釈書の科門を提示する⁽⁶⁾。最後に、テキスト全体の和訳を付しておく。

注記

- (1) Eimer 1978, pp.46-51.
- (2) Yensho Kanakura et al. ed., *A Catalogue of the Tohoku University Collection of Tibetan Works on Buddhism*, Sendai 1953, p.307, Na5941.
- (3) Guenther, 1959.
- (4) Yoshimizu Chizuko, *Descriptive Catalogue of the Naritasan Institute Collection of Tibetan Works*, Vol.1, Narita 1989, pp.294-295, Na1788に Blo bzang thub bstan chos kyi nyi ma (1883-1937) による *Byang chub lam gyi sgron ma'i bshad mdor bsdus thar lam bgrod pa'i themis skas zhes pya ba* という注釈書が伝えられている。この他の、筆者の手許には Blo gros mtha' yas による *Byang chub lam gyi sgron ma bzhugs so* なる注釈書が存在する (*Byang chub lam sgron rtsa 'grel dang / sems tsam gzhung sum cu pa dang / rtsa 'grel yi ge'i bshad pa mkhas pa'i kha rgyan bcas bzhugs*, Sarnath 1989)。また、現代においても Sonam 1997をはじめ、いくつかの注釈書が存在する。
- (5) テキストは Eimer 1978, pp.229-253を用いる。同書p.228によると、本校訂テキストは、ボンの Loden Sherab Dagyab 所有のものに基づいている。和訳では、根本偈の本文がわかりやすいよう、太字で下線を付している。
- (6) この論争については、Williams 1998, pp.107-182において詳細に論述されている。
- (7) Eimer 1978, p.50, n.25.
- (8) このシノプシスについては、望月1998以降の『菩提道灯論』の和訳に付していたのだが、途中箇所 に誤って付された数字があり、以後の読み方にも誤りが生じている (Cf. Mochizuki 2002d, p.67)。ここに、全体のシノプシスを提示することで、その誤りを訂正する。また、全体の構成は、Eimer 1978, pp.213-227を参照のこと。

『菩提道燈の注釈・本論の意味を明らかにする太陽』

のシノプシス

- 1 始めの意味
 - 1.1 相の意味
 - 1.2 始めの敬礼
 - 1.3 供養を述べたもの [BPP 1-2]
 - 1.4 始めに誓願をすること [BPP 3-4]
- 2 本論の意味
 - 2.1 三種の人の道をまとめて解説したもの
 - 2.1.1 簡略に説いたもの [BPP 5-8]
 - 2.1.2 詳しく解説したもの
 - 2.1.2.1 小の人の想 [BPP 9-12]
 - 2.1.2.2 中の想 [BPP 13-16]
 - 2.1.2.3 大の想 [BPP 17-20]
 - 2.2 三種の人の道を区別して解説したもの
 - 2.2.1 菩提心というまだ生じていない大宝を生じさせること
 - 2.2.1.1 簡略に説いたもの [BPP 21-24]
 - 2.2.1.2 詳しく解説したもの
 - 2.2.1.2.1 願の発心
 - 2.2.1.2.1.1 用
 - 2.2.1.2.1.1.1 七支
 - 2.2.1.2.1.1.1.1 飾られた場所 [BPP 25-26]
 - 2.2.1.2.1.1.1.2 七種のもの [BPP 27-28]
 - 2.2.1.2.1.1.1.2 帰依 [BPP 29-30]
 - 2.2.1.2.1.1.1.2.1 興奮を癒すこと [BPP 31-32]
 - 2.2.1.2.1.1.1.1.2.2 帰依に趣くこと [BPP 33-36]
 - 2.2.1.2.1.1.1.3 慈愛と悲心と意樂
 - 2.2.1.2.1.1.1.3.1 慈愛 [BPP 37-38]
 - 2.2.1.2.1.1.1.3.2 悲心 [BPP 39-43]
 - 2.2.1.2.1.1.1.3.3 意樂 [BPP 44-45]
 - 2.2.1.2.1.2 基体 [BPP 46]

- 2.2.1.2.1.3 結びの意味
 - 2.2.1.2.1.3.1 願の心の利益 [BPP 47-70]
 - 2.2.1.2.1.3.2 学ぶべきこと [BPP 71-74]
- 2.2.1.2.2 菩提に入る心を起こすこと
 - 2.2.1.2.2.1 菩提に入る心を起こす目的 [BPP 75-78]
 - 2.2.1.2.2.2 入る心を起こすこと自体
 - 2.2.1.2.2.2.1 律儀を受ける依処 [BPP 79-86]
 - 2.2.1.2.2.2.2 対象
 - 2.2.1.2.2.2.2.1 師があるもの [BPP 87-94]
 - 2.2.1.2.2.2.2.2 師がないもの [BPP 95-104]
 - 2.2.1.2.2.2.3 自体 [BPP 105-108]
- 2.2.2 菩提心という生じた大宝を損なわずに守る方法
 - 2.2.2.1 否定される方向 [BPP 109-114]
 - 2.2.2.2 論証される方向
 - 2.2.2.2.1 仏に従う学ぶべきこと [BPP 115-116]
 - 2.2.2.2.2 鎧を着ること [BPP 117-120]
 - 2.2.2.2.3 国土の浄化 [BPP 121-124]
 - 2.2.2.2.4 三門を清浄にすべきこと
 - 2.2.2.2.4.1 三門の浄化 [BPP 125-128]
 - 2.2.2.2.4.2 その原因 [BPP 129-132]
- 2.2.3 菩提心の損なわれていない大宝をさらに広げること
 - 2.2.3.1 二つの集まりを完全にすることを説いたもの [BPP 133-136]
 - 2.2.3.2 二つの集まりを完全にする原因を説いたもの
 - 2.2.3.2.1 福德の集まりを完全にする原因
 - 2.2.3.2.1.1 福德の集まりを完全にする原因となるものを説いたもの [BPP 137-140]
 - 2.2.3.2.1.2 その原因がない過失 [BPP 141-148]
 - 2.2.3.2.1.3 その原因を成立させる方法
 - 2.2.3.2.1.3.1 その原因を成立させる目的の方法を説いたもの [BPP 149-152]
 - 2.2.3.2.1.3.2 その原因を成立させること自体
 - 2.2.3.2.1.3.2.1 原因である止を成立させる利益 [BPP 153-156]
 - 2.2.3.2.1.3.2.2 まだ成立していない過失 [BPP 157-160]
 - 2.2.3.2.1.3.2.3 どのように成立させるのか [BPP 161-166]
 - 2.2.3.2.2 智慧の集まりを完全にする原因

- 2.2.3.2.2.1 智恵の完成を学ぶ必要を説いたもの [BPP 167-168]
- 2.2.3.2.2.2 方法をともなう必要を説いたもの
 - 2.2.3.2.2.2.1 智恵の完成が方法をともなう必要性 [BPP 169-172]
 - 2.2.3.2.2.2.2 方法と智恵とを離れる過失 [BPP 173-176]
 - 2.2.3.2.2.2.3 方法と智恵を分別すること
 - 2.2.3.2.2.2.3.1 方法を知る区別を説いてから誓願すること [BPP 177-180]
 - 2.2.3.2.2.2.3.2 方法を分別すること [BPP 181-184]
 - 2.2.3.2.2.2.3.3 智恵を分別すること [BPP 185-192]
- 2.2.3.2.2.3 方法をともなう無我の意味をその通りに修習すること
 - 2.2.3.2.2.3.1 論証する因
 - 2.2.3.2.2.3.1.1 結果を考察する有無生滅の因 [BPP 193-196]
 - 2.2.3.2.2.3.1.2 原因を考察する四辺の生滅や金剛片の因 [BPP 197-200]
 - 2.2.3.2.2.3.1.3 自性を考察する離一多の因 [BPP 201-204]
 - 2.2.3.2.2.3.1.4 テキストの正しい典拠を説いたもの [BPP 205-212]
 - 2.2.3.2.2.3.2 論証した意味
 - 2.2.3.2.2.3.2.1 修習の在り方自体 [BPP 213-220]
 - 2.2.3.2.2.3.2.2 修習の障害を取り除くこと [BPP 221-236]
 - 2.2.3.2.2.3.2.3 修習の利益 [BPP 237-240]
- 2.2.3.3 二つの集まりをすぐに完全にする方法を説いたもの
 - 2.2.3.3.1 マントラに入る必要性を説いたもの [BPP 241-248]
 - 2.2.3.3.2 それに入る方法 [BPP 249-256]
 - 2.2.3.3.3 誤って入る過失 [BPP 257-268]
 - 2.2.3.3.4 正しく入ることに過失がないことを説いたもの [BPP 269-272]

3 結びの意味

- 3.1 著者の菩薩 [BPP 273-276]
- 3.2 訳者の菩薩

『菩提道灯の注釈・本論の意味を明らかにする太陽』和訳

学説の大海の吉祥があり、把握できない悲心の鉤針によりすべての有情を正しく抱擁し、王が説かれた明らかな灯火であるアティシャの大徳を増やしてから念じ、尊敬して敬礼する。

慈愛と悲心の絶え間ない白光によりすべての有情の灼熱の煩惱を鎮められる善友と師と三大弟子⁽¹⁾などのカダム派の善なる友たちのところに座り、

幸運を高めてから解脱を望んだ後に、大きな荷車である二人〔ナーガールジュナとアサンガ〕の無垢を経承し、經典とマントラの道の要点を集めたこの『道灯論』を領受し、核心を把握しないでいる者がいる。

それ故にこのためによりテキストを意図してから、退くことなく聖教と論理を広げたものを譲り、自分に似た劣った智慧の者が入ることは喜ばしいので、理解しやすい言葉で少しばかりの注釈がなされる。

と言い、無比なる偉大な尊者である吉祥天の一人であるディーパンカラシュリージュニャーナが著したこの菩提道灯論自身を解説するものに三つ。始めの意味と、本論の意味と、結びの意味である。

[1] 最初に四つ。相の意味と、始めの敬礼と、供養を述べたものと、始めに誓願をすることである。

[1.1] 最初は、インドのよく合わされた天の言葉であるサンスクリットで、Bodhi は菩提、patha は道、pradi pa は灯である。チベットの言葉で、二障を残らずに浄化するので byang で、ありのままにありのままの一切の法を成立させ精通するので chub で、これを示す大宝により我々の言葉で菩提に至ることを説き、無上の道のその地位に行く路なので lam で、その道を明らかにするので sgron ma と言われる。

[1.2] 二番目に、利他のために菩提 (byang chub) を得ようと望むことから退かないので、衆生 (sems dpa') である。煩惱の粗い感触を滅し、不二の知恵の吉祥をそなえているのでマンジュシュリーである。金剛の身に老いと衰えがないので、童子であり、彼に二障の前から手をあわせ、無上菩提の地位を望むので、求めるのである。目的は、有漏と無漏の二智を最高と説くので、この本論は明らかな起源に属しており、それを知っているのでマンジュシュリーに敬礼すべきである。

[1.3] 三番目に、過去・未来・現在の、三時の四魔より勝れた一切の勝者たち、すなわち仏宝と、そのお心を相続し、有の性質を否定する二道、すなわち法宝と聖者の僧宝たちに帰依処の功德を割らずに信じることで記憶し、身体と言葉の大きな尊敬により帰依をなしてと言われ

ている。[BPP 1-2]

[1.4] 四番目に、大乘の法を聴く器をそなえているので、よい弟子で法の勝者で菩薩の相をもつチャンチュップウーという者によりお願いされるので、偉大な尊者自身により無上の菩提に行く道の順序の意味を誤りのない正しい在り方で明らかにする灯がよく明らかにされ、点火される。[BPP 3-4]

[2] 二番目の本論の意味に二つ。三種の人の道をまとめて解説したものと、三種の人の道を区別して解説したものである。

[2.1] 最初に二つ。簡略に説いたものと、詳しく解説したものである。

[2.1.1] 最初に、無上菩提を行くその道に、小の現高のものと中の解脱しただけのものと最高の仏の地位を得ることになる三つの道が存在するので、それぞれの道を求めるその人についても三と知るべきである。それら道の自性を武器とする相を誤りなくよく明らかに示した門から、それぞれの特殊な区別により書かれるべきである。[BPP 5-8]

[2.1.2] 二番目に、詳しく解説したものに三つ。小の人の想と中の想と大の想である。

[2.1.2.1] 最初に、この時に執着せず、後の利益や喜びを成立させようとする人の何れかが、業果に対する信解に先行する十不善を捨てる戒と、有漏の想である色の三昧などによる何れかの方法により輪廻の喜び、すなわち現高の身体を領受する喜びだけを把握してから、自分自身でそのように得ることを求めている者である彼は最後の人と知るべきである。[BPP 9-12]

[2.1.2.2] 二番目に、存在という輪廻の究極の喜びに対する執着を転じ、三門の罪過である不善業から退く本質をもつ別解脱の七種の何れかの戒に住する人の何れかが自分一人ですべての苦しみを滅する寂静だけを求めている人である彼は中であると言われる。[BPP 13-16]

[2.1.2.3] 三番目に、自らの相続に属し、自分自身が三界を輪廻する苦しみにより苦しむことが現われたりする小と中の人の智慧をよく浄化する人の何れかが他者、すなわち父母となる一切衆生のすべての苦しきも浄化し、再び戻ることなく尽くそうとあまねく、心から望む利他を求めることと同じことをそなえており、自分で無上菩提を求めることにより菩提に発心をするその人は最高で、大である。[BPP 17-20]

[2.2] 二番目に、区別して解説したものに三つ。菩提心というまだ生じていない大宝を生じさせることと、生じたものを損なわないことと、損なわずにさらに広げることとである。

[2.2.1] 最初に二つ。簡略に説いたものと、詳しく解説したものである。

[2.2.1.1] 最初に、聖なる衆生は器をそなえた所化であり、シャラワ⁽²⁾のお口から「聖なる衆生というものは論理に目覚め、意樂を浄化することをそなえている」とお説きになられているように、利他としての無上の菩提の地位の最高を得ることを望んでいる人たちに対して尊者自身が自分で作られたものではないセルリンパなどの聖なる師たちにより説かれた通りの概説に従ってから仏地に行く正しい方法が解説されるべきである。[BPP 21-24]

[2.2.1.2] 二番目に、詳しく解説したものに二つ。願の発心と入の発心である。

[2.2.1.2.1] 最初に三つ。用と、基体と、結びの意味とである。

[2.2.1.2.1.1] 最初に三つ。七支と、帰依と、慈愛と悲心と意樂とである。

[2.2.1.2.1.1.1] 最初に二つ。場所を飾り、依処を並べたものと、七種のものとである。

[2.2.1.2.1.1.1.1] 最初に、完全なる仏の像など、すなわち隆起した仏像と鑄造した仏像と、善逝の遺骨の心髄をもつ塔と三部の正法、すなわち経函の本に現前で向かった後である。

[BPP 25-26]

[2.2.1.2.1.1.1.2] 二番目に、明らかに存在するものの前に花と香と灯と香水と食物と音楽などの供養する事物と、何らかの価値のあるもの、すなわち吝嗇のない手で何らかの存在するものにより事物を供養をするべきである。[BPP 27-28]

[2.2.1.2.1.1.1.2] 意の変化の供養は、『普賢行願讃』に説かれている七種の供養、すなわち七支もなすべきである。ここに、「七つの供養」と述べた理由も、供養する事物と他のものを成立させる供養も、帰依の対象を喜ばせているので、そのように述べたものであるから、二番目のものに二つ。興奮を癒すことと、帰依に趣くことである。[BPP 29-30]

[2.2.1.2.1.1.2.1] 最初に、この時から菩提座に至るまで、すなわち菩提座をまだ得ていない間は三宝の帰依処を把握した後の瞬間にも不退転の心によりと言われている。[BPP 31-32]

[2.2.1.2.1.1.2.2] 二番目に、三宝に心を縛ってからよく信じ、身体で尊敬して膝を地面につけてから両手の掌を合わせた後、願う心の儀規をなす最初の帰依を三度するべきで、三度目に完成し、しっかりとした帰依が得られる。[BPP 33-36]

[2.2.1.2.1.1.3] 三番目に三つ。慈愛と、悲心と、意樂とである。

[2.2.1.2.1.1.3.1] 最初に、それから対象である一切の衆生を認識してから喜びの相をもとうとすることを熱望する慈愛の心が先行することによりと言われる。[BPP 37-38]

[2.2.1.2.1.1.3.2] 二番目に、地獄・餓鬼・畜生の三悪趣と、生老死などの人の苦しみと、命終に墮ちるなどの天の苦しみと、得ることと争うことなどの非天の苦しみという耐え難いものにより苦しんで、悩まされているすべての有情の悪い在り方を見て、悪趣の者たちが苦しみによる苦と、人と欲天に転じる苦と、上の二界に満ちている行の苦と、それらの苦が生じるすべての理由が生じるものからと、煩惱すなわち苦の原因をもつものからと言われる。[BPP 39-43]

[2.2.1.2.1.1.3.3] 三番目に、有情たちを救おうという悲心と意樂の浄化による記憶により一切の衆生の利益のために自分が完全な悟りを得るべきであると思って、退くことのない誓願のと言われている。[BPP 44-45]

[2.2.1.2.1.2] 二番目に、基体は、願の菩提の心を儀規の門から起こすべきである。[BPP 46]

[2.2.1.2.1.3] 三番目に、結びの意味に二つ。願の心の利益と学ぶべきことである。

[2.2.1.2.1.3.1] 最初に、そのように願の心を起こした功德や利益であるものは、『聖入法界品』に尊者マイトレーヤがたくさん二百以上の例えの門から解説している。願の心の儀規により把握したその菩提の經典などを自分で読誦し、師から聞いて、捨てるべきことを理解する種である完全なる菩提を把握しようと願う心の無限の功德をよく、限界を断じて知るべきで、その菩提心が自分の相続に存在し、損なわずにさらに広げる理由や因縁で、そのようにして繰り返し、日中三度、夜三度、心を起こすべきである。『居士施勇所問經』に、その菩提心の福德や利益をよく説いた、世尊の何れかの時に三偈だけに簡略にしてから説かれたものがこのテキストに書かれている。菩提の心の福德であるものを物質として成立させていないが、もしそこに物質があり、成立しているのならば、十法の虚空に遍満して、その利益は虚空界に満ち、それよりさらに虚空を空にしないであろう。さらにまたその菩提の心の福德に量と限りはなく、川であるガンガーの砂の極微の数と同じくらいの仏の国土を信仰をもつ何れかの人が供養の実体である天の宝石という自在の王で遍く溢れるほど満ちし、世間の守護者である仏世尊たちに対し尊敬して施しをなすことにより、いかなる人も師や三宝の近くで信じることにより、掌を合わせることをなして、無上の菩提に心を向けることを起こしたならば、またその発心を向けたならばと言われる。それと同じこの供養は前に解説したものよりも特にさらに勝れており、そこには量を把握することはないので、極限はないと言われている。 [BPP 47-70]

[2.2.1.2.1.3.2] 二番目に、利益を記憶することと六時に浄化する門から菩提を願う心を起こしてから、福德と智慧の二つの集まりを集めることをたくさん努力してあまねく広げるべきであり、この菩提心はこの時に尽きることなく、他生においても記憶するために四黒法を捨て四白法に依存するなどの解説した通りの学ぶべきことを完全に守るべきである。 [BPP 71-74]

[2.2.1.2.2] 二番目に、菩提に入る心を起こすことに二つ。菩提に入る心を起こす目的と、入る心を起こすこと自体である。

[2.2.1.2.2.1] 最初に、入る心の本質である律儀を守ることなしに、思の行である正しい門から菩提への発心を願うことが最高に増えることはなく、利他において完全な菩提を把握する律儀や誓願のその願心を広げ、究極に至ることを望む願心を広げる入る律儀に依存するのでそれ故に正しい努力によりこの入る律儀を確実に守るべきである。 [BPP 75-78]

[2.2.1.2.2.2] 二番目に三つ。律儀を受ける依処と、対象と、自体とである。

[2.2.1.2.2.2.1] 最初に、安全なる優婆塞から比丘の律儀までの七種の別解脱の律儀自体や出離の相をとまわらない門から自性の罪過である十不善を常に生活している限り守る律儀である菩薩の律儀とは別なるものをもっている者には、菩薩の律儀が生じる部分があるが、それ以外にそれらをもっていない者には菩薩の完成した律儀が生じることはない。七種の別解脱を如来が解説なされたことについて、在家の律儀より出家の律儀の方が勝れており、出家の方向の

梵行よりも仏の説法に入る完全なる梵行の律儀の吉祥たるものが最高で、完全であり、それが比丘の律儀というものの本体とお認めになられていると言われている。[BPP 79-86]

[2.2.1.2.2.2.2] 二番目の対象に二つ。師があるものと、師がないものとである。

[2.2.1.2.2.2.2.1] 最初に、規範師アサガが著した『菩薩地戒品』に説かれた通りの儀軌により、取る対象も正しい相をそなえている師からその通りに菩薩の律儀を受けるべきである。師の相も律儀の儀軌に長けた完全なる智慧と、自分自身で何れかの律儀に住する完全なる戒と、律儀を授けることに耐える完全なる能力や力と、悲心の完全なる想とをともなう四つの相をそなえた師が、よい師であると知るべきである。[BPP 87-94]

[2.2.1.2.2.2.2.2] 二番目に、師から律儀を受ける必要を説いたそれを努力する勇者が求めても、これと同じ相を具えた師がもし得られないならば、師が存在するその在り方とは異なる対象を明らかにする自分自身の律儀を受ける正しい儀軌が聖教に説かれている通りにここにも解説されるべきである。何の聖教に説かれているのかと言うのなら、それについて解説されており、過去時に尊者マンジュシュリーがアンバラージャ、すなわち「虚空王」という者になったことにより、如来が雷声の歌という王の近くから無上なる最高の菩提にお心を起こしたことが『文殊師利仏国土莊嚴經』に解説した通りに真実のままにこの本論でも明らかに記されるべきである。[BPP 95-104]

[2.2.1.2.2.2.3] 三番目に、守護者である仏や菩薩たちの目の前で、無上なる完全な菩提に発心し、父母となる一切の有情に究極の無上なる楽しみをごちそうし、注いでから、彼らを輪廻の苦の大海から救い出す。[BPP 105-108]

[2.2.2] 二番目に、菩提心という生じた大宝を損なわずに守る方法に二つ。否定される方向と、論証される方向とである。

[2.2.2.1] 最初に、忿怒による殺生を望むなどの害心と、すぐに心を乱す怒りの心と、家具を捨てることができない貪欲と、他者の円満に対して耐えられない嫉みとのそれら四つを律儀を受けた日の当日から把握して、無上の菩提の地位を得るべきで、得ていない間はなすべきではない。二根を合わせる性行為を捨てて、梵行を行うべきで、罪惡の行為とその原因である欲望の対象に執着することも捨てるべきである。[BPP 109-114]

[2.2.2.2] 二番目に四つ。仏に従う学ぶべきことと、鎧を着ることと、国土の浄化と、三門を浄化すべきこととである。

[2.2.2.2.1] 最初に、それらを捨てる戒の律儀を喜ぶことにより、仏・世尊の行に従う学ぶべきことをなすべきである。[BBP 115-116]

[2.2.2.2.2] 二番目に、自分自身が速くて長い方法や、心により菩提を得ることを望まず、一人の衆生の利益をなすために最後の終わりすなわち限りなく輪廻する間は存在するべきである。[BPP 117-120]

[2.2.2.2.3] 三番目に、数が無量で、功德の飾りである不可思議な仏の国土の過失を浄化すべきであり、諸有情が自分の名前を聴いてから取るべきであり、見や聞や記憶や接触によっても衆生を救済することを望んでから十方に住することをなしてから、衆生の世間を浄化すべきである。[BPP 121-124]

[2.2.2.2.4] 四番目に二つ。三門の浄化と、その原因とである。

[2.2.2.2.4.1] 最初に、自分の身体と口の行為がすべての面で墮ちているので、清浄にすべきである。簡略にすれば三門の諸不善業をすべての面でなすべきではない。[BPP 125-128]

[2.2.2.2.4.2] 二番目に、自分の身体と口と意は墮ちているので清浄にし、衆生の利益を広く成立させる原因は、前に得た入る心による主体である律儀に住しているので、その菩薩による律儀戒と摂善法戒と衆生利益戒という戒の三つの学ぶべきことを正しい在り方でよく学べば、戒の三つの学ぶべきことを愛惜をして尊敬すればするほど大きくなる。[BPP 129-132]

[2.2.3] 三番目に、菩提心の損なわれていない大宝をさらに広げることに三つ。何れかのものにおいて二つの集まりを完全にすることを説いたものと、何れかのものにより二つの集まりを完全にする原因を説いたものと、何れかの者が二つの集まりをすぐに完全にする方法を説いたものである。

[2.2.3.1] 最初に、戒により身口意の三つが清浄になるそのことにより、捨てられるべきものを清浄にし、考察されるべき功德の種を完全にすることが、その結果自身である利他を得ようと望む菩薩の悪行を制御する戒律を清浄にし、守るものである記憶と智恵と不放逸により大きな努力をすることで無上なる完全な菩提の原因である二つの集まりが完全になるのである。[BPP 133-136]

[2.2.3.2] 二番目に二つ。福德の集まりを完全にする原因と、智恵の集まりを完全にする原因とである。

[2.2.3.2.1] 最初に三つ。福德の集まりを完全にする原因となるものを説いたものと、その原因がない過失と、その原因を成立させる方法とである。

[2.2.3.2.1.1] 最初に、福德と智恵の本質をもつ集まりを完全にする特殊性をもつ原因が、十法の一切諸仏による六神通を起こしたものと認めになられている。[BPP 137-140]

[2.2.3.2.1.2] 二番目に、さらにまた喩例のように翼が破れて広げられない雑鳥が空を飛ぶことができないそのように、神通の力を離れていることにより、所化の衆生利益を広くなすことはできず、ありえない。菩薩が聞く場合にも、神通をもつ菩薩が昼と夜の一昼夜に集めた福德と智恵の集まりとなるものは、神通力を離れた者には、百の生においても生じることはありえない。[BPP 141-148]

[2.2.3.2.1.3] 三番目に二つ。その原因を成立させる目的の在り方を説いたものと、その原因を成立させること自体とである。

[2.2.3.2.1.3.1] 最初に、その理由により、すぐに完全なる菩提の二つの集まりを完成しようと望んでいる者は、強力な精進により努力した後に六神通を成立させるが、すべての昼夜に怠惰に時を過ごす者にはない。 [BPP 149-152]

[2.2.3.2.1.3.2] 二番目に三つ⁽³⁾。原因である止を成立させる利益と、まだ成立していない過失と、どのように成立させるかである。

[2.2.3.2.1.3.2.1] 最初に、身体を思い、浄化することにより止を正しく成立させずに、生じた力と実体であるマントラの力により神通は極微さえもなく、修習の力から生じた特殊な神通をもつものは生じないので、その理由により止を完成させるために、九住心の方法を何度も精進による大きな努力をなすべきである。 [BPP 153-156]

[2.2.3.2.1.3.2.2] 二番目に、止の支分である三昧の原因を集めたものを損ない、不完全な者による門から、その努力を修習しても、千年という長い時にわたっても、止の三昧は完成しないであろう。 [BPP 157-160]

[2.2.3.2.1.3.2.3] 三番目に、その理由のために規範師ボーディパドラの『三昧資糧品』に説かれている支分を多く説いても、最高のものは戒の浄化と少欲と儀軌を知ることと静かな場所に住することの四つによく住する門から、遍満の対象と考察される浄化の対象と賢者の対象と煩惱の浄化の対象という四つの対象のうち適当なものを一つに対して意をよく、他所に動かさずに設定すべきである。三昧を川の流れるように努力するヨーガの止が成立したならば、その力により神通と無分別の智慧も成立するであろう。 [BPP 161-166]

[2.2.3.2.2] 二番目に、智慧の集まりを完成する原因に三つ。智慧の完成を学ぶ必要を説いたものと、その智慧も方法をともなうことを必要とすることを説いたものと、方法をともなう無我の意味をその通りに修習することである。

[2.2.3.2.2.1] 最初に、止とそれにより導かれる神通だけが生じても、真実を理解する智慧の完成の行であるヨーガを離れた道の二障の何れかの種子は尽きることがない。 [BPP 167-168]

[2.2.3.2.2.2] 二番目に、三つ。智慧の完成が方法をともなう必要性と、方法と智慧とを離れる過失と、方法と智慧を分別することである。

[2.2.3.2.2.2.1] 最初に、その理由のために執着などの煩惱と二としての顕現である迷乱の習気という所知の障害がすべて捨てられるので、真実を理解する智慧の完成のヨーガを常時布施などの方法を伴うことにより修習すべきである。 [BPP 169-172]

[2.2.3.2.2.2.2] 二番目に、解脱を求める者が方法と智慧とを離れていれば仏を成立できないので、一緒に学ぶ必要がある。布施などの方法を離れた智慧と真実を理解する智慧を離れた方法も、どちらも何れかの理由のために縛られていると『維摩経』に勝者が説かれているので、それ故に方法と智慧の両方を捨てるべきではなく、一緒に学ぶべきである。 [BPP 173-176]

[2.2.3.2.2.2.3] 三番目に三つ。方法と智恵の区別を説いてから誓願することと、方法を分別することと、智恵を分別することとである。

[2.2.3.2.2.2.3.1] 最初に、では智恵は何、方法は何ということを理解しないことと、誤って理解することと疑惑の垢は捨てられるべきなので、方法と智恵の相をそれぞれ混同せずに正しい区別を明らかに説くべきである。[BPP 177-180]

[2.2.3.2.2.2.3.2] 二番目に、智恵の完成を捨てて、それを脇においてから、それより他の布施の完成などの一切の白善法が三時の勝者により方法として解説されている。[BPP 181-184]

[2.2.3.2.2.2.3.3] 三番目に、方法は出離しようと思うことから布施までを修習することで堅固にされるので、菩薩で自分自身で真実を確認する智恵を修習した者は、障を捨てる能力が広大なので無上なる菩提をすぐに得るが、無我だけを修習することでは菩提を得られない。五蘊と十八界と十二処は自性により生じることはないと理解し、自性を欠いている空性と知り、理解することを方法と智恵の両者の中から智恵と言うことが完全に解説されている。[BPP 185-192]

[2.2.3.2.2.3] 三番目に、方法をともなう無我をどのように修習するのに二つ。論証する因と、論証した意味をどのように修習するのかとである。

[2.2.3.2.2.3.1] 最初に四つ。結果を考察する有無生滅の因と、原因を考察する四辺の生滅や金剛片の因と、自性を考察する離一多の因と、テキストの正しい典拠を説いたものとである。

[2.2.3.2.2.3.1.1] 最初に、自らの宗派で存在を説く者たちが「自性による生は存在しないことは成立しない。事物が自性により生滅することは明らかに見られるから」と言うのならば、では芽が自性により生じるならば、原因の時に有無と両者とどちらでもないものと似た何かのものが自性により生じるということを考察する場合、最初の通りならば、存在しているものが生じることは正しくない。存在はすでに成立しているので、さらに生じる必要は何もないからである。二番目の通りならば、自性が存在しないことも虚空の花の通りである。三番目の通りならば、前に解説した両方の過失になってしまうので、成立しない。四番目の通りならば、原因の時に有無の両方になることも生じず、あり得ないからである。[BPP 193-196]

[2.2.3.2.2.3.1.2] 二番目に、事物は自らより生じない。その生は意味がないものであり、限り無いものになってしまうからである。他すなわち自性により成立する他の原因から自性による成立する他の結果が生じるならば、原因であるものとならないものとのすべてのものから結果であるものとならないものとのすべてが生じることになってしまうので成立しない。両者からでもない。自他のそれぞれから生じることが否定されているからである。無因からでもない。無因から生じるならば、世間に収穫が生じるからであり、行為などに対する努力も無意味になってしまうからであり、それ故に諸事物はそれ自体自性により成立することはない。

[BPP 197-200]

[2.2.3.2.2.3.1.3] 三番目に、また一切諸法は、法をもつもので、自性により成立しない。自性により一多の何れかの相として成立すると考察するならば、自性により成立する自体は極微たりとも認識されないので、得られないからである。例えば影像のように。この因により自性により存在しないものとして確定するべきである。[BPP 201-204]

[2.2.3.2.2.3.1.4] 四番目に、空性を了義の聖教により論証したものが、『空性七十論』と『根本中般若』などの典拠から論理を集めた残りのものと『経集』などからも、諸事物の自性は自らの側からは成立せず空性が成立すると広く解説しているものが存在しており、本書では広げない。何故ならばテキストが多くなるので、これはあるものを基本の通りに智恵で理解する喜びを述べようとするので、それ故にこのテキストでは多くは広げず、聖教と論理により成立する中観帰謬派の宗義の主たる主張のみに尽き、無我を修習する目的でよく解説したものである。[BPP 205-212]

[2.2.3.2.2.3.2] 二番目に、論証した意味をどのように修習するかについて、修習の在り方自体と、修習の障害を取り除くことと、修習の利益とである。

[2.2.3.2.2.3.2.1] 最初に、そのように一切法は真実ではないものとして設定されているので、それ故に蘊などのすべての法自身が自性により成立することは、極微たりとも、論理により求める時に得られず、把握されないので、人と法の無我を修習する者自身に、「このように修習することが智恵の修習である」と言われている。無我を理解する智恵により一切法はいかなるものも自性を求めることにより見られず、そのように智恵自身も論理により考察し、求めれば、自性により成立することは得られないそのように、その対象と対象をもつものと生と無と同じものを真実と把握し分別することなしに三昧をし、それを修習すべきである。[BPP 213-220]

[2.2.3.2.2.3.2.2] 二番目に、真実を把握し分別する原因を作ってから生じた存在が輪廻するこのことが、相を把握する分別の主体であるので、それにより設定されただけのものには属さない対象自身から成立するものは極微さえも存在しないので、それ故にすべての相を把握する分別を捨ててから、最高の涅槃の地位を得ることである。そのように成立しても世尊により、自性により成立していると把握される分別は、輪廻の根本である大無明であり、それ故に輪廻の大海に落とすものである。前に無我の意味を正しい論理により設定したように、真実を把握しようとする執着の対象は否定され、相を把握する無分別の三昧に住し、修習をなせば、塵のない秋の空のように法性を直接に知覚することで二としての顕現の習気をとまなう分別がなく、捨てられ、所知の究極において智恵を広げることも明らかになるであろうと説かれている。さらにまた『入分別陀羅尼』にも、大乘のこの正法を無我と理解する智恵が先行する勝者の子は、無分別を思い、何度も修習したならば、分別に似たとても行き難く、捨て難いものを超えて、

順序通り無分別の智恵の究極を得るであろうと説かれている。そのように聖教と論理の百の門により一切法は生じることのない性質で、真実として成立することが存在しないと確定し、虚構を断じてから、原因である対象を無分別という正しい在り方で修習すべきである。[BPP 221-236]

[2.2.3.2.2.3.2.3] 三番目に、そのように方法により尽きた真実性を修習したならば、大中小の三つの資糧道を行く彼が、順序に従って集道の暖などを得てから、出世間智により最初の歓喜などの十地を順序に従って得るであろう。結果を完成した仏の菩提も長くなくすぐに得るであろう。[BPP 237-240]

[2.2.3.3] 三番目に、二つの集まりをすぐに完成する方法を説いたものに四つ。すぐに二つの集まりを完成しようとすることでマントラに入る必要性を説いたものと、それに入る方法と、誤って入る過失と、正しく入ることに過失がないことを説いたものである。

[2.2.3.3.1] 最初に、マントラを繰り返す力から成立したものになった止の行為と広げる行為などの灌頂の行為と、呪法の行為により、すべての願望が生じるよい瓶を完成するなどの八大成就などの力によっても、楽して早い道により大菩提の資糧を完成し、利他を成立させようとするために特に勝れた想をもつことで器をもつものが、所作のタントラと行のタントラなどの中から瑜伽タントラと無上瑜伽タントラのそれら四大部のタントラに説かれている利益を見するために、「もし密教の修行を受けようとするのならば」と言う。[BPP 241-248]

[2.2.3.3.2] 二番目に、共通の道のタントラの浄化が先行する器を伴うことになるその時に、規範師が喜んで、灌頂を得るために、身体と口による尊敬と宝などの望まれる通りの財産の布施とお言葉と、受取ってから正しい在り方の通りに成立したものなどの三つの門の事物すべてによりその聖なる師自身を喜ばすべきである。師を喜ばせてから生じたものにより最後の子音を授ける完全なる金剛である規範師の灌頂による器に適するものとなっている。そのように灌頂により三門の障害や雑染をとまなう罪をすべて浄化する主体たるものは、大中小の三つの成就を完成させる部分をもつてであろう。[BPP 249-256]

[2.2.3.3.3] 三番目に、『初仏時輪根本大タントラ』に努力の門から禁じられているので、梵行と優婆塞と出家の五部の適当なところに住する規範師が秘密と智恵の知識を本質とする灌頂をすることは適切ではなく、そのような師や規範師の梵行の律儀に住している者は、事物を受けるべきでもない。もしそのようにそのものの灌頂を受けて、取ったならば、仏世尊による梵行の苦行の律儀に住している者が、「適当ではない」と禁止されていることを恥知らずに行っているので、梵行の苦行と出家のその律儀を損なって、戒律のその行儀をもつ者を制圧することと同じ根本の過犯が生じ、それらの罪過の結果として悪趣に確実に落ちるので、長い間善趣の言葉だけでも聞くことは難しいので、事物の成就を完成することはいかなる時にも存在しない。[BPP 257-268]

[2.2.3.3.4] 四番目に、所作の行などのすべてのタントラを弟子が聞いたり、規範師が読んだり、両者が一緒に火施の供養などをして正しく住し、灌頂の四つの行為と八成就を完成するなどの行為者である人が、規範師による灌頂を得て、獲得し、彼自身が十を理解し、そなえたものに過失はない。[BPP 269-272]

[3] 三番目に、結びの意味に二つ。著者の菩薩と、訳者の菩薩である。

[3.1] 最初に、十八部の先端の頂きの宝である偉大な尊者ディーバンカラシュリーによる経部などからタントラ部までの論書の概説の諸法からの解説を見た者である大徳チャンチュップウーによる請願に由ってから、最高の菩提を行く大乘の道の解説をまとめただけのものである。『菩提道灯論』という偉大な規範師ディーバンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。[BPP 273-276]

[3.2] 二番目に、インドの賢者ディーバンカラシュリーと、チベットの翻訳官比丘ゲウエー・ロドゥーが翻訳、校正し、出版した。

これは、大雑把な言葉の意味だけを自分のために書いたものであるが、詳しいものはシャルの偉大な尊者ラマである勝者ツォンカパの『菩提道次第』というすべての経典を博学に見る眼で経典とタントラの千のよい教義の究極の大河を一方に集める吉祥をとめないよく解説するその大海であるそのテキストが『菩提道灯論』の意味の注釈しているので、大註と並んで書く苦勞の必要も無く、そのテキスト自身を聞く者が著されなければ、この本論の意味の究極の概説を確実に獲得するであろう。述べられている。

インドの五百名のパンディタの成就のたてがみの宝座に智慧の威光を上におくように、指の爪に日が注ぐ日の出の輝きをもち、飾られ、灯火をともしたという三地において、そのよく知られているお言葉の滋味である『菩提道灯論』の本論の意味を僅かばかりの注釈する善の千の輝きにより有情の相続を浄化する心で蓮華の庭園を広げなさい。

と『菩提道灯論註・本論をよく明らかにする太陽』という本書自身は、目的をもった自分の弟子たちが語義を心に把握することを「これこれこのように喜ぶべきである」と促す顔で、タツカルトゥルという名前のローサン・ベルデン・テンジン・ニャンタックが自分の禅定の修行場所である法界の閑処や「上に生じた谷⁽⁴⁾」と呼ばれるところで禅定の時間をさいて著したこれによっても、三種のブドガラの道の順序を説いたものをすべての方向に広め、詳細な原因としなさい。

オーン、吉祥なれ。

よい智慧 (blo bzang) で、一切の勝者の吉祥 (dpal) なる知をそなえた (ldan) 解説を完成したものを説いた (bstan) ものを把握している ('dzin) ので、賞賛されて (snyan) 知られている (grags)⁽⁵⁾。大悲と大宝という比べるもののない師のお足下を思い出すことのみによりご遺骨を浄めてそれを敬う。

存在の滅の最高の引率である聖教により生命を与える原因である数学などの論理の教義や希有なる行為が大海の門を開く最高なる医者からこの世で育てる母である、

妙音により作られた満天の衆生と完成した道のこの在り方を広げるために、大変化を点火する大河から経函という百の川をすべての方向に導くために、

三門を努力する何らかの善なるものがある。子供をもつすべての勝者の二資糧を一つにまとめ縛ることですべての有身の者は正法を保持し、完全なる菩提を得なさい。

仏教の美しい世界の一人の吉祥で主唱者である仏王のお足下の蓮華を常に堅固にし、なされた千光の輝きをすべての方向に放つことで利益と幸福の蓮華の園を微笑みなさい。

その力により勝者が説かれたものが長く繁栄し続け、法をそなえた国の地位を大きく高め、すべての余情も法の通りに行うことであらゆる幸福で吉祥なる相により生活しなさい。

特別に大きな恩恵により述べられたものと関係を結んだすべての相をそなえた優れた善友を接受してから、完全なる道を行く究極に至り、一切知の勝者の地位をすぐに得なさい。というのも、勝者のラマで医師たるプラジュニャー・マニチョグから天の宝をもつことを促すことを私にジャンペル・ルルペードゥーデーが鉄と羊の年(1871年)に誓願したことに、善あれ。この型[木]⁽⁶⁾は薬学・数学部⁽⁷⁾にある⁽⁸⁾。

注記

- (1) Tib.: sku mched gsum. 『藏漢大辞典』, p.120b: Po to ba dang / sPyang snga ba / Phu chung ba. この三大弟子の由来については、*Deb ther sngon po* に伝えられている。Cf. 羽田野 1986, pp.92-93, Roerich 1979, pp.263-264.
- (2) 1070-1141. Cf. 羽田野 1986, pp.109-111, Roerich 1979, pp.271-273.
- (3) テキスト (Eimer 1978, p.242) には「二つ」とあるが、実際には三項目があげられている。
- (4) Tib.: yar bskyed lung pa.
- (5) 著者である Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags の名前が織り込まれている。
- (6) Tib.: spar.
- (7) Tib.: sman rtsis khang.
- (8) Eimer 1978, p.51.

略号と文献表

BPP	<i>Bodhipathapradīpa</i> . in Eimer 1978.
Eimer 1978.	Helmut Eimer, <i>Bodhipathapradīpa</i> , Wiesbaden.
Guenther 1959	Herbert V. Guenther, <i>The Jewel Ornament of Liberation by sGam po pa</i> , London.

- 羽田野 1986 羽田野伯猷『チベットインド学集成第1巻 チベット篇Ⅰ』法蔵館.
- Mochizuki 2002d Kaie Mochizuki, *A Study of the Mahāsūtrasmuccaya of Dīpaṅkaraśrī-jñāna*, Minobusan University.
- 望月 1998 「アティージャの『菩提道灯論』和訳(1)」『身延論叢』3, pp.1-33.
- Roerich 1979 George N. Roerich, *The Blue Annals*, repr., Delhi.
- Sonam 1997 *Atisha's Lamp for the Path to Enlightenment*. Ithaca.
- Williams 1998 Paul Williams, *The Reflexive Nature of Awareness*, Richmond 1998.

(本研究は平成14年度日本学術振興会科学研究費「基盤研究(C)(2)」による研究成果の一部である)